

佳作

灯台のシクンシ

波本町馬

親愛なるメアリーへ

こんにちはメアリー、元気かい？ 君のことだからきつと元
気だろうね。

パパは今、貨物船ナローニック号の船室で手紙を書いている
んだ。この手紙が君に届くのはいつ頃だろう？ とにかく今日
は一八九三年二月十一日、時刻は午後八時五十分。そう、君が
港でパパを見送ってくれた日の夜に、パパは君へ手紙を書いて
いるってわけさ。君も知つての通り、海の上から手紙を書いて
出すなんて初めてのことだよ。ちゃんと君の所に届くといいいけ
れどね。何せ船の上では電話を使うことができないんだ。でも、
あと何年かしたら船の上で無線通信というものが使えるように
なるかも知れないと言われている。つまり、電話線がなくても
遠くにいる人と話をするができるようになるってことさ。
もしそうなつたら、どんなに遠い海の上にもパパは君とお
喋りをする事ができるんだ。どうだい、素敵だろう？

ところで、イングランドからアメリカまでかなりの長旅だ。
ニューヨークつていうのは凄く遠い所なんだよ。だけど心配す
ることはない。天気はいいし船の具合も上々、おまけに仲間の
乗組員やお客さんもみんないい人たちだ。食事だけはちよつと

いまいちだがね。何にせよ、今回は順風満帆の航海になりそう
だ。ただ、ニューヨークに着くのは待ち遠しいね。あそこはどつ
ても楽しい町なんだ。君も大きくなつたら、いつか船に乗せて
一緒に連れて行つてあげよう。

それはそうとメアリー、家ではいい子にしてるかい？ 元気
なのはいいことだが、パパがいないからといってはしやぎすぎ
て、伯父さんや伯母さんに迷惑をかけてはいけないよ。いいね？
さて、まだまだ書きたいことはあるけれど、今日はこの辺に
しておこう。暇があればまた手紙を送るよ。

クリスマスより

◆
その年は寒かった。少し前に夏が過ぎ去つたばかりだとい
うのに、冷たい風が時折吹き抜けては辺りの船や建物から熱を
奪つていく。心なしか、港で働く人々も例年より厚着をしてい
るように見える。それは、灯台の中にいるジョニーも同じだつ
た。

灯台の窓を拭きながら地面を見下ろすと、貨物倉庫の向こう

から青年が駆けてくるのが見えた。それが甥っ子のチャールズだと分かると、ジョニーは手を止めて時計を一瞥し、青年に向かつて声を張り上げた。

「遅刻だぞチャールズ！ 十八時に交代だと言っただろう！ 何分待たせる気だ」

チャールズはびくつと肩を震わせて立ち止まったが、怯むことなく灯台の上部へと大声を返す。

「悪かったよジョニーさん！ でも遅刻だったって、たかが二、三分だろう？」

「馬鹿野郎。港を出入りする船にとっちゃ一分一秒が一大事なんだ！ 前にも教えただろうが」

チャールズは、怒鳴るジョニーの傍らに空き瓶があるのを目敏く見つけ、不満げな顔で言い返す。

「生憎だけど、仕事から一杯やつてる人に説教されたくはないね」

だがジョニーはさして気にも留めず、ただ鼻で笑った。「何が悪いんだ。灯台守なんて退屈な仕事、酒でもなきややつてられるか」

チャールズは呆れ顔で灯台に入り、短い階段を上がつてジョニーの横に並んだ。

「そう退屈な仕事とも思えないけどな。この港はそんなに船の出入りが少ない所でもないし、大抵忙しいだろう？」

「どうだか。俺からすりゃ、日がな一日同じ場所にいる仕事なんざそれだけで退屈だね」

「でも、毎日色々な船が入ってくるのを眺めていられるなんて、僕なら楽しいと思うけどな」

半年前に就職を果たしたばかりの新人灯台守チャールズが咄くと、職歴二十年以上のベテラン灯台守ジョニーは冷ややかに答える。

「そう思っていられるのも今のうちさ。俺はもう見飽きちゃまって、どんな船が入港してきたところで珍しくも何ともない。もっとも、伝説のナローニック号が帰ってきたりでもしたなら話は別だがな」

「ナローニック号？ 何だい、それは。船の名前？」

「何だお前、知らないのか。新参者め」

ジョニーは詳しい説明もしてやらず、業務を甥に託すと階段を下り、空き瓶を持って外に出た。そのまま港を見回す。一分一秒に左右されているはずのフェリーやタグボートや舢舨はやけにのんびりとした様子で波止場近くに浮かんでおり、それと比べると周囲を行ったり来たりしている男たちの動きは妙にせつかちに見える。空は青い。しかし青いと言っても抜けるような青空ではなく、言ってみれば大気が海水を含んだような、どこか湿つぽさのある空だ。微かに霧も出ているようである。

家に向かつて歩き出した時、ジョニーは木製の小さな棧橋に目を留めた。その上で、小さな影が僅かに動くのが見えた。ジョニーは、その影が何であるのか少し興味を覚え、何とはなしに棧橋の方へ歩いていく。

近づくにつれ、影の正体が棧橋の上でしゃがみ込んでいる少

女の後ろ姿であると分かつてきた。身の丈を見るに、年齢は小学校に入つて間もないくらいか。恰好の小綺麗さからして家はそれなりに裕福であるか、少なくとも親から人一倍の愛情を受けているであろうことは推察できた。

海水で濡れた部分を歩いてきたからだろうか、棧橋の上には彼女の靴が付けた薄い足跡が残っている。その足跡に沿うようにして棧橋を進んでいくが、少女は海の方を向いて屈んだまま、ジョニーに気付く様子もない。ゴールドブラウンの髪が風に揺れている。海風以外に何も無い場所で一休何をしているのかと数十フィート後ろから覗き込んでみると、彼女は棧橋の板と板の隙間に向かつて何かを振り入れている。少女の小さな手から離れ、吸い込まれるようにして隙間に消えていく、粉に似たいくつもの黒い点々。植物の種か何かだろうか。ジョニーは、この子が何をしているのか無性に聞いてみたくなった。

「お嬢ちゃん」

ジョニーの声に、少女は首だけ動かして彼の方を見た。唐突に声をかけられた割には大して驚いている風もなく、表情はぼんやりしている。沈みかけの夕日を反射して金色に光っている目も、どことなく虚ろだ。ジョニーは躊躇いながらも素知らぬふりをして続ける。

「こんな所で何してるんだい」

彼の問いに、少女は細い声で一言だけ答える。

「……花の種を蒔いているの」

ジョニーは足元を見下ろす。板と板の隙間を抜けた花の種は、

当然ながら海の水に落ちて文字通り泡と消えていく。

「海に種を蒔いても花は咲かないぞ」

しかし少女は答えもせず、左手に握り締めた無数の種を右手で黙々と蒔き続けている。

「元氣のない子だな。お前さんも酒の一杯でも飲んだらどうだ？」

空の瓶を掲げおどけた調子で言ってみるが、やはり彼女は見向きもしない。ジョニーの方も少し馬鹿らしくなり、先ほどより真面目な声で尋ねる。

「お前さん、名前は何ていうんだい」

少女は種を蒔く手を止めた。

「メアリー・テスチよ」

「……メアリーか、そいつはいいや。十八世紀の女海賊と同じ名前だ」

「あらやだ。メアリーと言ったら海賊じゃなくて女王様の名前よ」

それまでこれといった反応を見せなかった彼女は、そこで初めてちよつと怒つたような表情を見せた。

「いいんだよ、どっちでも。俺にとつちや、メアリーつてのは女王より海賊の名前だ」

ジョニーの強情さが可笑しかったのか、少女の口元が僅かに綻ぶ。

何秒かの間を置いて、彼女は呟くように言った。

「ここに種を蒔くようにって、パパにお願いされたの」

ジョニーは彼女の目を見る。

「……君の親父さん、名前は何というんだ」

「……クリストファー・テスチ」

◆

親愛なるメアリーへ

そっちは何月何日だろう？ パパがいなくても平気でやっているかい？ こちらは出航から一日経ったけれど、君の元気な声が聞けないのでパパは早くも少し寂しい思いをしているよ。

パパが今いるのは、君のいるリヴァプールよりちよつと西に行つた所にあるウエールズとある島だ。この港で船は少しだけお休みをする。その間に水先案内人さんを降ろしたり燃料を補給したりして、大西洋への船出に備えるんだよ。明日の朝に港を出て、南下して海岸線を離れたら、イギリスともしばらくのお別れだ。パパからの手紙も、次からは君の所へ届きづらくなるかも知れないね。何せ、前にも言ったがニューヨークは本当に遠い所なんだ。『リヴァプールからロンドンまでと同じくらい？』なんて君は言うかも知れないけれど、そんなものじゃない。もつと何十倍も離れた所さ。いつだったか、君に大きな地図をあげただろう？ あれを見てみるといい。ところでメアリー、そっちの空模様はどうだい？ こちらはちよつと前までいい天気だったんだけど、だんだん雲行きが怪しくなってきたよ。出航の前にまた晴れてくれるといいんだがね。

話は変わるけれど、一つ君に断っておきたいことがあるんだ。

リヴァプールを離れる少し前、君にちよつと変なことを言ってしまった件でね。もし君がああ時の話を気にしているのであれば、あれはほんの冗談だと思つて忘れてほしいんだ。ただ、パパも君と一緒にお花が好きだというだけの話さ。そうそうお花と言えば、君にあげた種が何の花の種かまだ教えていなかったね。あれはシクンシという花の種なんだ。アジアの方に咲いていて、ヨーロッパでは見られない珍しい花さ。何でも、咲いてすぐの頃は白い花だが、時間が経つと少しずつ赤い色に変わっていくらしい。面白いだろうか？ 実を言うと、その花の種もニューヨークで手に入れたんだ。あそこには世界中から色々なものが集まってくるんだよ。

さて、明日からの本格的な航海に備えて今日は早く寝るとしよう。メアリー、君も夜は遅くまで起きていたりせずにごつすり眠るんだよ。それじゃ、おやすみ。

クリスより

◆

私のパパはね、船乗りさんなの。

「いつも大きな船に乗つてね、ニューヨークっていう所まで旅をしてからこの港に戻ってくるの。その度にお土産を買つてきてくれるのよ」

メアリーと名乗る少女の声は相変わらず小さいが、先ほどま

でに比べ機嫌が良いことは容易に見当が付いた。親子仲が良いのだろう。

「そのパパがね、ニューヨークから花の種を持ち帰ってきた時に言っていたの。もし自分が死んだら、お墓にこの種を蒔いてほしいって」

メアリーの話しぶりは年の割に落ち着いているばかりか、やや淡々としすぎているようにも感じられる。

「それで、その親父さんは今どうしてるんだい」

「……分からないの」

彼女の目は水平線の一点を見つめている。

「ずっと前にニューヨークへ出発して、それっきり。私、パパが何日で戻ってくるか数えてるのよ。でも、二百十九日経っても戻ってこないの。前にパパがくれた大きな地図を周りの人に見せて、パパは今どこにいるの？ 調べてみたけど、誰も教えてくれなくて」

いつの間にか、少女の表情は初めて会った時と同じ物憂げなものに変わっている。

「だから私、思ったの。……ひょっとしたら、パパはもう死んじゃったのかなって」

「それで、海に花の種を蒔いてたのか？」

メアリーはこくりと頷く。ジョニーは数秒の逡巡を経て口を開いた。

「君の親父さん、みんなからクリスって呼ばれてただろう」

「……おじさん、パパのこと知ってるの？」

「ああ。……お前さんは知らないかも知れないが、親父さんと俺とは学生時代からの友達なんだ」

見上げるメアリーの目が、^{すが}縋るようなものに変わる。

「じゃあ、パパがどこにいるのかも知らない？」

「……クリスはな、」

答えながら、ジョニーは少女の小さな頭に手を置く。

「今も元気に海の上を旅しているんだ」

メアリーの顔を見下ろす。その表情はジョニーの言葉に納得しているようにも、腑に落ちずまだ何か考えているようにも見える。ややあつてメアリーは尋ねた。

「おじさんのお名前は？」

「俺か？ 俺はジョニー。灯台守のジョニーだ」

「灯台守さんなの。何だか素敵ね」

メアリーは少し元気になったように見える。

「素敵なものか。毎日毎日同じことの繰り返しで、まるで面白いのない仕事さ」

彼はそこでふと、先ほど自分が出てきたばかりの灯台に目をやった。

「あれが、俺が働いている灯台だ。……お前さん、どうせならあの下に種を蒔いたらどうだい。あそこなら土もすっかりしてるし、ちゃんと花が咲くはずだ」

メアリーは灯台の方をしばし眺めてから頷いた。日が沈む前にとジョニーが急いで灯台の下に小さな穴を掘ってやり、そこにメアリーが種を入れる。彼女が土を被せ終える頃、栈橋の方

からジョニーの声でした。

「おいメアリー、見てみるよ。海に何かが浮いてるぜ」

波に揺られているそれはよく見ると瓶のようであり、水から拾い上げてみると、栓をした中に丸められた紙が入っているのが外からでも分かった。



親愛なるパパへ

お元気ですか？ 船の上から出してくれたパパのお手紙、読みました。

私は今、伯父さんと伯母さんのおうちで手紙を書いているの。この手紙がパパに届くのはいつ頃かしら？ 今日は一八九三年九月十八日。パパの船が港を出発してからも二百十九日も経ったのよ。ということは、パパが出した手紙もそんなに長い間、海の上を漂っていたということだね。何だか想像も付かないわ。

今日ね、ジョニーさんっていう灯台守のおじさんに会ったの。パパの昔からのお友達だつて言ってたわ。ちよつと怖そうだけど面白いおじさんで、パパがくれたお花の種も灯台の下に蒔いていいよつて言ってくれたの。ジョニーさんもパパに会いたそうな顔をしていたわ。

パパ、もうニューヨークには着いた？ 次はいつ戻ってくるの？ 早くムセンツウシンっていうものが使えるようになれば

いいのに。そうすれば、どこにいてもパパとお喋りすることができるでしょう？ 私は一人でも平気だけど、伯父さんや伯母さんが寂しがってるのよ。だから早く戻ってきてね。私、パパがいない間にもつと背が伸びたんだから。

メアリーより



ジョニーが仕事を終えて灯台から出てくると、すぐに「ジョニーさん」と声が聞こえた。見れば灯台のすぐ近くにメアリーが立っている。右手に持っているのは、昨日棧橋で発見した瓶の中に入っていた紙切れだった。

「これ、見て」

彼女から手渡されたそれを広げて見る。内容からして手紙のようであり、いわゆるボトルメールというやつだろう。宛先は「親愛なるメアリーへ」、差出人は「クリスより」と書かれている。父親から娘に向けて書かれたものらしく、初めて海の上から手紙を出すことや、リヴァプールから見えてニューヨークがとてもし遠いことなどが綴られていた。読み終えたジョニーは、メアリーに聞こえるか聞こえないかという声で呟く。

「まさか、お前さんがクリスに会いたがついてた矢先に当人から手紙が来るとはな。しかも、波任せの手紙なのに正確な宛先に届いた。流石、船乗りは波の動きを読むのが得意なことか」
言いながらメアリーの方を見ると、彼女はジョニーの言葉を

聞いているのかいないのか、自分の上半身が隠れるくらいの地図を広げて睨めっこしていた。

「それが、前にクリスマスから貰ったっていう地図かい」

「そうよ」

「案外小さいんだな」

「そうかしら？ 私にはとつても大きく思えるけど」

それからメアリーは、地図の中からニューヨークの位置を指差して言った。

「ねえジョニーさん、ニューヨークってどんな所なの？」

「いい町さ。この町と同じくらいか、あるいはもっと賑やかかも知れん。あそこにはどんな人もいるし、どんなものもあるんだ」

「ジョニーさんもニューヨークに行ったことがあるの？」

「いいや、俺はない」

「なあんだ」

「でもな」

彼は思わせぶりの表情を作る。

「たとえ行ったことがなくても、あの町のことはよく知ってる。俺や昔の仲間たちはみんな、学生の頃は遠い外国の町に憧れていたものだ。だから、将来は必ず船乗りになるつもりでいたんだ」

「パパもそうだった？」

「いや、クリスマスだけは違ったな。若い頃のあいつは、海にも外国にも大して興味がなさそうだった。だから、学校を出たら俺

が船乗りになってあいつが灯台守になるに違いないと思ってたよ。それが真逆になったんだから、人生は分らないもんだろ？」

メアリーは不思議半分、好奇心半分といった顔で聞いている。

彼女は既に、自分の知らない父の姿を滔々たうたうと語ってみせるジョニーに強い興味を示し始めている。

「ところで、左手のそれはどうしたんだい」

メアリーは左手に、彼女が持つには大きすぎるくらいの空き瓶を握っていた。クリスマスからの手紙が入っていたものだ。ジョニーがよくよく見ると、中には別の紙が入っているようである。「昨日の夜、パパにお返事を書いたの」

「ははあなるほど、海から届いた瓶の中に返事の手紙を入れて、また海に向けて流すわけか」

ジョニーが言うともアリーの口元が上機嫌そうに綻んだ。

二人は棧橋に立って海面に瓶を浮かべ、それが岸から離れていくのを見送った。



親愛なるメアリーへ

今日も元気にしているかい？ パパが今どこにいるかというと、周囲に陸地が見えなくなつてしばらく経つた辺りだ。

ついさつきまで、船室で仲間の乗組員たちとわいわい楽しんでたんだ。仲間とお酒を飲みながら陽気に語らっていると、

若い頃を思い出すんだよ。君はお酒も酔っ払いもあまり好きではないだろうけれど、そのうち大人になればパパの気持ちも分かるはずさ。

今夜は月が出ていないから、海を見回しても真つ暗闇だ。さっきまではみんなで盛り上がっていたから気付かなかったが、みんなが寝静まってみると、夜の海というのは寂しいものだよ。船の明かりと波の音以外には何もなし、何より家族がそばにいないからね。

クリスマスより



クリスマスから届いた手紙の一件以来、メアリーは度々ジョニーの灯台を訪れるようになった。彼女は学校が終わるとしばしば波止場へやって来て、シクンシの種を植えた辺りを欠かさず確認しては灯台に入り、ジョニーと話したりチャールズと遊んだりした。伯父や伯母と一緒に暮らしていたメアリーは決して家族と仲が悪いわけではなかったが、どこか居心地の悪さも感じていたらしく、やがてジョニーの所で過ごす時間が少しずつ増えていった。灯台近くの海を見ると、稀にクリスマスが出したであろう手紙入りの瓶が浮いていることがあった。それを心待ちにしていることも、彼女が灯台をよく訪れる理由の一つだった。

ある日、ジョニーとメアリーは灯台の窓から港を見下ろしていた。例によって、夕方に仕事を交代するはずのチャールズが

遅刻している。彼が現れるのを待ちながらジョニーが苛立っているのは、メアリーの目にもすぐ分かった。

「あの野郎、またどこぞで油売ってんじやねえだろうな」

灯台のレンズの点検を終えたジョニーは、荒い口調で呟きながらそばに置いてあった酒を飲む。一息ついてげつぷをする。

「そんなにお酒をがぶ飲みすると体に良くないわ」

外を見ていたメアリーは、ジョニーの方を向いて迷惑そうに言う。呆れ半分、心配半分といった具合だ。

「ハッ、お子様は酒の何が分かるんだい」

鼻で笑いながらも、ジョニーはそこで酒を飲むのを一旦やめる。

「ねえ、若い頃のパパとジョニーさんはどんな風に仲が良かったの？」

彼の機嫌を直すためか、メアリーはいつものように質問をした。昔の自分やクリスマスの話をする時、ジョニーの口振りは少し嬉しそうになる。

「そいつは聞かない方がいい。あいつも俺も、学校をサボって悪さばかりしてたからな。不良仲間と賭けをしたり、昼間から酒を飲みまくったり」

「それは今と同じなのね」

「ああ、同じさ。クリスマスも俺と同じことをしてたし、同じことを考えてた。でも、いつからかみんな少しずつ変わっちゃったな。結局、仲間の中で誰もが憧れる船乗りになれたのはあいつ一人だった」

しかし、ジョニーは思い出話の最後に決まっただけのこと
を言い、ちよつと寂しそうな顔をする。それを聞いているメア
リーも似たような顔になる。

「でも、私は灯台守も素敵だと思わう」

そう言うのと、ジョニーは何が可笑しいのか片眉を上げて彼女
を見る。

「よし、それじゃあメアリー、灯台守に欠かせない大事な言葉
を二つ教えてやろう。ボン・ヴォーヤージュ、って言葉だ」

「何、それ？」

「知らないか？ 船出する旅人に言う言葉だよ。フランス語で
『良い旅を』って意味のな。この港から知り合いが船出する時、
俺はいつもこの言葉をかけるんだ」

「でも、『良い旅を』って普通に言うのじゃ駄目なの？」

「ここぞとてここでわざと外国の言葉を使うからかっこいいん
じゃないか。分かってないな」

「ふうん……えっと、ボン、何だっけ」

「ちゃんと聞いとけよな。ぼんうおやあ」

酒のせいとか舌が回らないジョニーを見てメアリーは笑った。
当のジョニーはしばらく顔を顰めていたが、結局は彼も笑った。



親愛なるパパへ

パパ、お元気ですか？ 私は元気よ。

今日もチャールズが遅刻したの。おかげでジョニーさんはぶ
んぶん怒ってたわ。でもジョニーさん、その代わりに私には若
い頃のパパのお話をしてくれたのよ。昔はパパもジョニーさん
もやんちゃだったのね。それにしても、パパがいない間に他の
人からパパの思い出話を聞くのって、何だか不思議な感じね。

今日はジョニーさんが新しい言葉も教えてくれたの。『ボン・
ヴォーヤージュ』って言葉、きつとパパも知っているでしょう？
でも私、どうせなら遠くへ出かける人を見送る言葉よりも、帰っ
てきた人を出迎える言葉の方が知りたいわ。もしフランスにそ
ういう言葉があるなら、パパが帰ってきた時にそれを使うこと
ができるのに。

そうそう、この前ね、灯台の下に植えたシクンシがやつと花
を咲かせたの。パパが前に教えてくれた通り、最初は白かった
花が少しずつ赤い色に変わっていつて、とつても綺麗。パパに
も早く見せてあげたいわ。でもジョニーさんったら、それを見
て酔っ払いの顔みたいだなんて言うのよ。ジョニーさんらしい
けど、お花には失礼だと思わう。どうしてそんなこと言うのっ
て聞いたら、ジョニーさんはシクンシの花を見慣れているか
ら、色が変わるのを見ても面白くないと思えないんですって。でも、
シクンシはヨーロッパであまり見られない珍しい花なんでしょ
う？ どうしてジョニーさんは見慣れているのかしら。不思議
だわ。

船が出航して随分長いこと経ったけれど、パパはもうニュー
ヨークに着いているのかしら？ 次の手紙を受け取るのが待ち

遠しいわ。

メアリーより

◆

親愛なるメアリーへ

やあメアリー、今日の手紙はちよつと短めだよ。

ナローニック号はあと数日でニューヨークに着くという所まで来ている。ただ運が悪いことに、ここに来て天気が崩れてきたんだ。ウェールズに寄港した辺りからその兆しはあったんだけれどね。とにかくそういうわけだから、今夜の海はかなり荒れることになるだろう。だからいつもより早い時間に手紙を書いて君に出すことにしたんだ。悪天候の中を航行するのは重労働だが、こうした時こそ優秀な船乗りの腕の見せどころなんだよ。この嵐を乗り切り次第またすぐ君に手紙を出すつもりだ。もつとも、その頃にはパパはもうニューヨークに着いているかも知れないけれどね。

クリスより

◆

親愛なるパパへ

パパ、お元気ですか？

私、今日で十歳になったわ。いつもみたいに灯台へ行ったら

ね、ジョニーさんとチャールズが私のために誕生日のお祝いをしてくれたの。ジョニーさんは相変わらずお酒ばかり飲んでいんだけど、とっても嬉しかったわ。私が十歳ってことは、パパが出発してからもう三年も経つからね。パパも、もしリヴァプールに帰ってくる時はニューヨークでプレゼントを用意してから来てよね。と言っても、パパが戻ってきてくれたらそれだけで私には最高のプレゼントなのだけど。

お祝いの途中で、ジョニーさんとチャールズが私を楽しませるために寸劇を披露してくれたの。だけどチャールズはともかく、ジョニーさんはお世辞にも上手とは言えなかったわ。でも聞いてみたら、学生時代のジョニーさんはパパと一緒に演劇をやっていたんですってね。私、ちつとも知らなかった。長いことずつと一緒にいるのに、まだまだ私の知らないことも沢山あるのね。それでジョニーさん、私に何て言ったと思う？ 『リヴァプール中を探しても俺ほど演技の上手い奴はいないぞ』ですって。私、思わず笑いそうになっちゃった。だって、普段からジョニーさんは何をしてもジョニーさんっていう感じがして、演技をしたり嘘をついたりするのも凄く苦手そうなんだから。

ニューヨークでの生活はどう？ 気が向いたらこちらにも帰ってきてね。私、パパとジョニーさんが一緒に演劇をやるところを見てみたいわ。

メアリーより

◆
親愛なるパパへ

こんにちは、パパ。しばらく手紙を出せていなくてごめんなさい。

今日、灯台の近くまで行ったの。そしたら、今年もまたシクンシの綺麗な白い花が咲いているのを見つけて、それでパパに手紙を書かなきゃと思って、今こうして手紙を書いているのよ。

最近、ジョニーさんが病気がちになって家に籠もることも多くなったわ。チャールズは『きっと酒の飲みすぎだろう』って言うてた。私も多分そうだと思うけど、前より元気がないように見えて心配なの。でも、お見舞いに行ったりするとかえって私の方がジョニーさんに心配されるのよ。ちゃんと学校に行ってるかとか、伯父さんや伯母さんと仲良くしてるかとか。もう十二歳なんだから子供扱いしないで言うても聞いてくれないの。困ったものね。

パパからの手紙もしばらく前から届かなくなつて、私はちよつと寂しい思いをしているわ。きつとニューヨークが素敵な所だからなのだろうけど、こんなに長いこと会っていないものだから、そろそろパパのことを忘れてしまいうで怖いもの。わがまま言うてごめんさい。でも、きつとジョニーさんも同じことを考えていると思うわ。パパの顔を見たら、ジョニーさんも今より元気になるんじゃないかしら。

メアリーより

◆
青い空に夕日の色が溶けている。

メアリーが港にやって来ると、小さな栈橋の先で人影が僅かに動くのが見えた。西日と向き合うようにして座っている後ろ姿の方へ、メアリーはそつと近付いていく。栈橋に付いた足跡に日光が当たる。

彼女が隣に腰を下ろした時、ジョニーはそこで初めて気が付いたように顔を横へ向けた。夕日を浴びたその顔は色が少なく、どちらかと言えば咲き始めのシクンシの花に似ているとメアリーは思った。

「こんな所で何しているの？」

「ああ、ちよつと海風に当たりたくなつてな」

少しだけ囁れた声で言うてから、ジョニーは軽く咳き込んだ。

「外に出て大丈夫なの」

「何だよ、お前さんまで俺を病人扱いしやがつて。こんなのは酒の一杯も飲めばすぐに良くなるぞ」

ジョニーの言い草を聞き、メアリーの頬が微かに緩む。一方ジョニーは彼女に目をやり、思い出したように言う。

「急に背が伸びたな、メアリー」

「そうかしら。伸び方は前と同じくらいだと思っけど」

「……そうか。しばらく会っていなかったせいでだろうな。人間、そばにいる時間が長いほど相手の変化に気付かないものだ」

「じゃあ、ずっと遠くにいたパパが帰ってきて私を見たらどれほどびつくりするのかしらね」

ジョニーはそれには答えず、黙ってメアリーの頭に手を置いた。いくらかの間があり、彼は水平線に目を向けたまま口を開いた。

「メアリーは、将来は何になりたいんだ」

「どうしたの、急に？」

「何となく聞いてみただけさ」

「……まだ分からないわ。ジョニーさんは、私に何になってもらいたい？」

「俺に聞くなよ。お前さん自身になりたいものになればいいだろ。いい男に嫁入りして平和に暮らしてもいいし、女の身で船乗りや灯台守になるのも悪くない。お前さんのことだし、その気になれば何にだってなれるだろう。ああ、ただし海賊はやめとけよ。女海賊メアリー・リードは敵に捕まって牢屋で死んだと言われているからな」

「ジョニーさん、今日のお話は何だか真面目ね」

「……いや、クリスならこんなことを言いそうだと思うてな」

「パパが？ どうして？」

メアリーは尋ねたが、ジョニーは聞かえなかったように「ちよつと体が冷えちまつたな」と身震いしてから、ゆつくり腰を上げて立ち上がった。

「そうだメアリー。お前さんが植えたシクンシの花、今年もそろそろ色が変わる頃だな」

「ええ」

「あの花の種な、俺も昔、クリスからニューヨーク土産に貰ったことがあるんだ」

メアリーに向けた言葉ではあるものの、ジョニーの口調は独り言に近かった。彼はもう一度小さく咳き込み、踵を返すとやや頼りない足取りで棧橋の上を歩き出す。遠ざかっていくその背中、メアリーの目には妙に小さく見える。彼の姿が更に小さくなる頃までじつと同じ方向を見つめていると、不意にガラスがぶつかるような高い音が聞こえた。音のした方へ目を向けると、棧橋からそう離れていない岸辺近くの水面に何かが浮いている。瓶だ。反射的に腕を伸ばして拾い上げてみると、思った通り中には丸められた紙が入っている。しかしよく見ると、その紙は今までにクリスから受け取った手紙のように小綺麗なものではなく、薄汚れてところどころ破れているものだった。メアリーはふと顔を上げて灯台の方向を見た。既にジョニーの姿はない。日が沈み、港は夜を迎えつつあった。



メアリーへ

この手紙が運良く君に届いてくれることを祈りたい。

今日は一八九三年二月十九日、時刻は午前三時十分。パパにはもう時間がない。あまり多くを書き記すことはできない。

君に見送られてリヴァプールを出航した貨物船ナローニツク

号は今宵、目的地のニューヨークへ向け大西洋上を進んでいた。思いがけぬ風雨と吹雪に見舞われ難航していた矢先、船は発見が遅れた氷山に衝突した。二時間ほど前のことだ。既に多くの人が溺れ死んだ。我々乗組員と客たちの一部は二艇の救命ボートに乗り移ったが、片方は暴風雨のために転覆した。

午前三時二十分。船体を傾けて浮かんでいたナローニック号も大波に吞まれ、海中へ沈んでいく。我々はもう神に祈るしかないが、恐らくこのボートも助かりはしないだろう。パパはこの最初で最後の手紙をボートの上で書いているが、混乱して何を書くべきか定まらない。だから、一番大事なことだけを書こうと思う。

メアリー、君を愛している。今、君に伝えられることはそれだけだ。パパには時間がない。君にもう一度会えないことが、大人になった君の姿を見られないことが心残りだ。

クリス

この手紙を見つけた誰かへ

メアリーとは、この手紙を書いている乗組員クリストファー・テスチの娘の名だ。彼女はリヴァプールの港近くで伯父や伯母と一緒に暮らしている。女海賊から取ったその名に相応しい元気で賢い子で、私の自慢の娘だ。

貨物船ナローニック号は沈没した。私を含め、総員が死亡することになるだろう。もしメアリーでない誰かがこの手紙を見つけたのであれば、どうかこの手紙をリヴァプールにいる彼女

に届けてはもらえないだろうか。住所を記した名刺を同じ瓶に入れておく。私の死を知ったら娘はきつと悲しむだろう。でも、知らせることなく彼女にもどかしい思いをさせるのはもつと心が痛む。どうか、人助けだと思つてこの厚かましい願いを聞いてください。



「メアリー！」

自分を呼ぶ声にメアリーが振り向くと、貨物倉庫の向こうからチャールズが歩いてくるところだった。灯台のそばにしゃがんでいたメアリーは、足元の花を踏まないように気を付けながら立ち上がり手を振った。

「何をしてるんだい」

「シクンシの種を集めてるの。他の場所にも植えようと思つて」
そう言つてメアリーは微笑んでみせる。チャールズは少し意外そうな顔をした。

「もつと落ち込んでるかと思つてたな。思つたより元気そうで良かった」

メアリーは彼の言葉を聞いているのかいないのか、手の中に集めた無数の黒い種をしばらくじつと見つめてから顔を上げた。

「どこかでチャールズ、無線通信つて覚えてる？」

「無線……ああ、ジョニーさんがよく話してたやつか。それが

どうかしたのかい」

「この間、港の人たちが話してたの。最近、船の上でも無線通信が使えるようになったんだって」

「つまり、船に乗って遠くを航海してる人と話をする事ができるようになったってこと？ だとしたら凄いな。遠くの海にいる君の親父さんともお喋りができるかも知れないってことだろうか？」

「……うん、そうかもね」

チャールズはそれから少しばかり世間話をした後、メアリーと別れて灯台の中に入った。いつものように短い階段を上がり、遅刻をどう誤魔化そうかいつものように考えながら最上部に到着して、何気なく口を動かす。

「それにしても、メアリーはすっかり大人びたなあ」

そして「ジョニーさん」と呼びかけようとして口を嚙む。自分一人しかいない灯台の中を見回してから、言いかけた名前を飲み込んで代わりに溜め息をつく。窓から見える外の海では、一分一秒に左右されているはずの船たちが相変わらずのんびりと動いている。

西の海を柔らかな太陽が照らしている。時折吹く秋の風が心地良い。

メアリーがしゃがみ込むと、桟橋の板が僅かに軋んだ。その場に空き瓶を置き、丸めた手紙と、袋に詰めたシクンシンの種を入れる。顔を近づけると、ジョニーの好きだった強い酒の匂い

がした。栓をし、それらを中に閉じ込める。潮の流れを見てから、瓶を水面に浮かべて手を離す。波に乗って桟橋からゆっくり遠ざかっていく瓶を見ていると、先ほどまでより夕日が照りつけ波音が大きくなってくるような気がした。

メアリーは立ち上がって踵を返し、リヴァプールの港町へと帰っていく。



親愛なるパパへ

お元気ですか？ 私は元気です。

ナローニック号に乗って出発するパパを見送ってから、気が付けばもう七年が経っていました。七年よ。自分でも信じられないわ。月日ってこんなに早く過ぎ去るものなのね。前にジョニーさんが言っていたわ、楽しい時間ほど風のように過ぎていくものだって。リヴァプールの港は今も活気があって、だけど妙に穏やかです。七年前と同じ。でも、七年の間に少しずつ変わってきたことも沢山あるの。だから、もしパパが今のリヴァプールを見たら、私が想像している以上にびっくりするかも知れないね。

この間、ジョニーさんが息を引き取りました。元々お酒を沢山飲む方だったし、本人も長生きはできないだろうって言っていたけど、それでもこんなに早いとは思わなかった。お葬式の時も我慢していたのに涙が止まらなくなって、チャールズに心

配されてしまったわ。

物知りなジョニーさんは、いつも私に色々なことを教えてくれたの。でも、パパから届いた一通のポトルメールのことだけは死の間際まで教えてくれませんでした。パパを乗せてニューヨークへ進んでいたナローニック号が、船員もろとも大西洋に沈んだこと。その直前にパパが手紙を書いて、瓶に入れて海に流したこと。それをたまたま自分が拾ったこと——それらを隠すためだけに、ジョニーさんは七年間パパのふりをして私宛の手紙を書いては、瓶に入れてリヴァプールの海に浮かべていました。どうしてそんなことをしていたのか、もう本人に聞くことはできないわ。でもきつと、親友の幼い一人娘を悲しませたくない、ただその一心だったんじゃないかしら。

普通に考えれば、大西洋から流された瓶がいつも都合良くリヴァプールに流れ着くなんてことあるはずがないもの。それは七年前の私もきつと子供心に分かっていたと思うわ。手紙の差出人がパパであることも心のどこかで疑っていたのかも知れない。でも気付かないふりをしていたんだと思うわ。パパを失うことはやっぱり怖かったし、ジョニーさんを裏切るのも同じくらい怖かったから。きつとジョニーさんも、どうするのが私にとつて一番いいのか、パパからの手紙を拾った時からずっと考え続けていたんじゃないかしら。もつとも、一見大雑把そうな彼のことだし、本当はそんなこと考えてなかったかも知れないけどね。

人が死んだ後どこに行つて何になるのか、私には見当も付き

ません。でも、もし死後の世界で自分の好きなものになれるんだとしたら、きつとジョニーさんは船乗りになるんじゃないかって思うわ。私は灯台守をしているジョニーさんが好きだったけれど、彼自身はずつと船乗りに憧れていたから。だから、もしジョニーさんが船に乗つてパパの所へ行くことになったら、パパは灯台の明かりを点けてしつかり彼の船を照らしてあげてね。

パパの好きなシクンシの種をこの手紙と一緒に瓶に入れます。と言つても、シクンシつていう名前も実際にはジョニーさんが教えてくれたものだから、本当かどうかは怪しいけれど。灯台の下に蒔くといいわ。花の色が赤に変わったらジョニーさんにも見せてあげてね。きつと喜ぶはずよ。

他にも書きたいことは沢山あるのだけど、続きはまた今度にしましよう。そうね、私が今より大人になった時にでも。だから、パパともジョニーさんともしばらくのお別れね。でも、ただ「さよなら」つて言うのは味気ないわ。だから代わりにこの挨拶を送ります。

パパにボン・ヴォヤーリュ。ジョニーさんにもボン・ヴォヤーリュ。

メアリーより